

理事長研修報告

「ともに生きるシンポジウム」

理事長 野間田です。下記の研修に参加してきましたので、報告します。

テーマ:「ともに生きるシンポジウム」

とき:11月22日(火)

ところ:クレオ大阪中央

主催:全国肢体不自由児者父母の会連合会(全肢連)

このシンポジウムは、日本財団助成による「重度障害者(医療的ケアを含む)が地域で格差なく暮らせる社会の創造」検討事業として開催されたものです。講師は、社会福法人伊達コスモス21理事長 大垣勲男氏 社会福祉法人 西宮市社会福祉協議会 副理事長 清水昭彦氏 大垣氏からは、「重度障害者(医療的ケアを含む)が利用する GH 実態調査中間報告」と題して、全肢連がおこなった医療的ケアを含む重度重複障害者当のグループホーム(以下 GH)を運営している事業者を対象にした実態調査の中間報告でした。また、併せて都道府県別の居住支援サービスの利用状況の一覧表も資料として配布されました。

GH は、全国で 158,167 人が利用しており都道府県別では、北海道 13,929 人、東京都 13,362 人、大阪府 11,643 人と大阪は、3 番目でした。大阪では、R3.4 月～R4.4 月の 1 年間で GH の利用者が1,214 増えています。これは、全国で 1 番多い数でした。ちなみに 2 番目は、東京都の 1,022 人でした。

調査から見えてきた課題として次の 4 点について指摘がありました。①建設費に対する施設整備の国庫補助が不十分②GH 制度の脆弱性③重度訪問介護の国庫補助基準の問題(市町村の負担が多くなる仕組み)・ホームヘルプサービスの非定型的勤務の評価が低いので報酬をアップすべき。④認定特定行為業務従事者が行える医療的ケアの範囲が狭い。清水氏からは、「西宮の状況報告-重い障害のひたちの地域生活展開-」と題して西宮市の「青葉園」の重い障害がある人たちが拓いてきた地域の暮らしの紹介がありました。青葉園は、1981 年に西宮市社会福祉協議会の運営により発足されましたが、1950 年代から始まった重症心身身体障害児者の地域生活運動からの積み重ねがありました。

その原点になっている考え方の一つは、「本人中心の計画づくりから、その人らしい暮らしづくり」ということです。青葉園では、「個人総合計画」と呼ばれる本人中心の計画とそれに基づいた生活支援が進められてきました。やがて、そのスタイルは、西宮市内全体に広く認識され、今は、西宮市独自方式として「本人中心支援計画」として進められています。本人中心支援会議には、本人を囲んで、家族、事業者・後見人などが一同に会して本人の意思を確認します。

研修を受けて感じたことは、「言うは易く行は難し」です。西宮市が「本人中心支援計画」というような今の形を作り上げるまでには、粘り強くそれを願う信念や情熱が不可欠だと感じました。

講演後にディスカッションの時間があったのですが、「今の若い職員はサラリーマン化しているのではないか？自分たちの若い頃は・・・」と「なげき」にも似たやりとりがありました。運動の原点であった信念や情熱をどうやって、今の若い職員にバトンタッチしていくのかという大きな課題があるようでした。

運動がスタートした当時と現在の社会状況や人の意識は、大きく変わっていますので、当時と比較することは、難しいと考えます。ただ、今現在福祉に携わってくれている若い職員も、利用者と接することのすばらしさややりがいを感じていると思います。

人の尊厳というものが抽象的な遠くの理念ではなく、日常の支援の中にこそあり、それを現場の職員は体験できるということを忘れてはなりません。

